

# V フォー・ヴェンデッタ

2006(平成18)年5月7日鑑賞(道頓堀東映パラス)

★★★★



監督＝ジェームズ・マクティエグ／脚本＝ウォシャウスキー兄弟／原作＝デイビッド・ロイド／出演＝ナタリー・ポートマン／ヒューゴ・ウィービング／スティーブン・レイ／ジョン・ハート／スティーブン・フライ／ロジャー・アラム／ティム・ピゴット＝スミス／ベン・マイルズ／ジョン・スタンディング／シニード・キューザック（ワーナー・ブラザーズ映画配給／2006年アメリカ映画／132分）

## 第1章

あなたは  
何本見た？

……2020年の近未来のイギリスは独裁国家となり、国民は圧政の下にあった。21世紀の初頭「世界の憲兵」として君臨していたアメリカは既に植民地に……。これは、そんな恐ろしい想定の下につくられた奇想天外な「革命エンターテインメント」映画だが、意外と真面目に考えさせられる面も……。 「月光仮面」も「怪傑ゾロ」もあくまで「正義の味方」だが、この映画に登場する仮面の男“V”の本性は……。そして美しきナタリー・ポートマンは、この映画ではどんな役柄を……。 アメリカン・コミックと異なり、ブリティッシュ・コミックは奥が深く（?）、「火薬陰謀事件」と「ガイ・フォークス・デイ」の勉強が不可欠だよ……。

## こりゃ一体何の映画……？

映画のタイトルを聞いただけでは、「こりゃ一体何の映画……？」と思う作品が時々あるが、これがその典型……。だってこのタイトルからは、何のイメージも湧いてこないはずだから。しかし、新聞の宣伝を見たり映画館に置いてあるチラシを読めば、これは、民主主義が破壊され独裁国家となったイギリスの近未来を描いた映画だということがわかる。

しかし、かなりマンガチックな仮面男の姿を見ても、また『マトリックス』3部作のクリエイターとプロデューサーのコンビが新たに仕掛けた前代未聞の革命エンターテインメント」という謳い文句を読んでみても、是非この映画を観よ

うという意欲はなかなか湧いてこなかった。

ところが現金なもので、主役がナタリー・ポートマンということを読んで、がぜん、「こりゃ観てみなくては……」という気分……。 「チラシ」を読むと、かなり過激かつ刺激的な言葉が並んでいるが、さて、見込み違いでなければいいが……。

## こりゃ面白そう……！

この映画の舞台は、夜の11時以降は外出禁止令が出されているという近未来、すなわち2020年のイギリス。映画の冒頭、BTN（英国放送）に勤めている若く美しい女性イヴィー（ナタリー・ポートマン）が外出の身支度をしているシーンが登場する。そしてなぜか彼女は外出禁止令を無視して外出。

ところが間の悪いことに、それを秘密警察“フィンガーマン”たちに見とがめられ、逮捕されようとしたところを救ったのが“V”と名乗る仮面の男（ヒューゴ・ウィービング）。

この日、すなわち2020年11月5日、“V”はサトラー議長（ジョン・ハート）に対して公然と反旗を翻した。それはBTNを占拠して映像とマイクを独占のうえ、サトラー議長の圧政を糾弾し、抑圧された市民に対して、来年11月5日の国会議事堂への集結を呼びかけるもの。さすが「演説の国イギリス」だけに“V”がマイクを通じて国民に対して熱く呼びかけるこのアピールは説得力十分。これを聞いたサトラー議長が怒り心頭に発したことは当然で、直ちに“V”逮捕の対応がとられたが……。

こりゃ、決してマンガでもなく、『マトリックス』のような訳のわからない映画でもなさそう。こりゃ面白そう……。思わず私も身を乗り出して、その後の展開に集中することに……。

## 原作は？

パンフレットによれば、この映画の原作は、アラン・ムーアが原作を手がけ、デイビッド・ロイドが作画をつとめてカルト的な人気を博した作品。これは1981年イギリスの月刊コミック誌『Warrior』に連載され、『Warrior』廃刊後、5年の

休止期間を経てDCコミックにて、シリーズが再開されたとのこと。

そしてその内容は、1980年代のサッチャー政権時代の超保守体制をモデルにしたもので、その一党独裁政権国家の転覆を試みる“V”の活躍を描いているというから、すごいもの……。

もっともパンフレットにおけるジェイムズ・マクティーン監督へのインタビューには、「原作者のアラン・ムーアは不満なようですが、近年のコミックの映画化作品のなかでは格段に原作に忠実ですね」との質問があるが、さて、その意味は……？

## 火薬陰謀事件とは？ ガイ・フォークス・デイとは？

この映画をきちんと理解するためには、最低次の2つの勉強が不可欠。その第1は火薬陰謀事件。これは、国王を首長とする英国国教会から弾圧を受けたカトリック教徒のレジスタンス13名が、国王暗殺のために、1605年11月5日の国会開会の日に国会議事堂の爆破を企てた事件。しかしこの陰謀は事前に発覚し、貴族院の地下に潜んでいた実行犯たるガイ・フォークスは逮捕されて国家反逆罪となり、拷問の末に絞首刑にされ、遺体は火あぶりにされ、「四つ裂き」にされたとのこと。

その第2はガイ・フォークス・デイ。火薬陰謀事件はイギリスでは有名となり、イギリスでは11月5日はガイ・フォークス・デイと呼ばれているとのこと。その日、人々はかがり火を焚いて、花火を打ち上げ、ガイ・フォークスそっくりの仮面が国中で売られるという習慣になっているとのこと。

この映画で“V”が11月5日という日にこだわったのは、こんな歴史的事実を踏まえたもの……。

## 知らないことがいっぱい！ 試される知性……？

この映画を理解するためには、上記の他にも、“V”お好みの、テレビ放映されている『モンテ・クリスト伯』（日本では『巖窟王』）やチャイコフスキー作曲の序曲『1812年』などの知識が必要。したがって、あなたの知性が試される内容がいっぱい。

ところが、今日たくさん来ていたアベックたちの会話を聞いている限り、映画鑑賞後こういう知的な会話(?)をしているやつらは1組もなし……。やはり、若者たちもパンフレットを購入して、この映画の前提となる歴史的背景をいろいろと勉強しなくちゃ……。

## ナタリー・ポートマンの女優根性に拍手！

女優は演技力も大切だが、それと同時に美しさが大切。前者が不十分でも後者さえあればそれで十分やっていける女優もたくさんいるから、どちらにウエイトを置くかは人それぞれ……？

ところが、神サマは決して公平ではないから、この二物を与えられた女優が世の中には何人か存在する。ナタリー・ポートマンもその1人。そして、こんな女優に限って、「役のためなら」と平気でその美しさを投げ捨ててしまうことができるもの……。

その代表が、ハリウッドビューティーのトップを走るシャーリーズ・セロン。『モンスター』(03年)では何と10kgも体重を増やし、「不細工メイク」をタップリと施して、文字どおり「モンスター」になりきった。また、『G.I. ジェーン』(97年)のデミ・ムーアも同じで、男の兵士と対等になるため、自ら頭にバリカンを当てて美しい髪の毛をカットして坊主頭に……。

しかして、『V フォー・ヴェンデッタ』では、“V”に協力した疑いで逮捕されたイヴィーは、当然のように頭を丸坊主にされたうえ、“V”の隠れ家を自白しないため数々の拷問を受けるという役柄にチャレンジ……。『G.I. ジェーン』ほどハードではないものの、前半あれだけキレイだったイヴィーが、後半は坊主頭の姿だけで登場するのはかなり勇気がいるはず。

しかるに、頭を丸坊主にすることについて、「全然！ スキンヘッドにするなんてワクワクだったわ」と平然と言っているナタリー・ポートマンの女優根性に拍手！

## “V”の正体は……？

この映画では“V”は最後まで仮面を外さないから、“V”を演じるヒューゴ・

ウィービングは大変。だって、表情による演技は全くできないのだから。そのうえ、ラスト近くになってイヴィーからのキスを受けとめるのも仮面をつけたままだから、何の役トクもなし……？

それはともかく、この映画では当然“V”の正体がポイント。その詳細をここに書くつもりは毛頭ないが、“V”の素顔はラークヒル収容所にあった。すなわち、収容所のV号（5号）室に収監されていたのがこの“V”で、それを知っていたのはリリマン主教（ジョン・スタンディング）やデアリア監察医（シニード・キューザック）など数人だけ。そんな彼が、謎の大火事が発生した収容所の中で、唯一人生き残ったのはなぜ……？

そして、収容所閉鎖から10年、彼は一体何をしていたのか？ さらに、そんな彼が復讐を誓う相手は誰？

また、2021年11月5日に国会議事堂に国民を集結させて議事堂を爆破すると予告したのは、何を指すもの……？ そんな数々の謎の答えは、映画を観てのお楽しみに……。

## サトラー議長はヒトラー兼金正日……？

今や権力の頂点にあるサトラー議長は「終身議長」の地位を約束されているから、いわば北朝鮮の金正日みたいなもの……？ また、「国家忠誠法」によって反政府運動を弾圧し、プロパガンダの重要性を認識しているのは、ナチスドイツのヒトラーと同じ……？

もっとも、国民大衆に対して直接熱っぽく語りかけたヒトラーと違い、サトラー議長はBTNのキャスターである、「イギリスの声」ことプロセロ（ロジャー・アラム）を通じて、自分の国民への声を代弁させているが、これはあまりうまいやり方ではないのでは……？

サトラー議長の側近には秘密警察を仕切るクリーディー（ティム・ピゴット＝スミス）やプロパガンダの責任者であるダスコム（ベン・マイルズ）たちの忠実な幹部が存在するが、その複雑な権力構造のあり方も、あなた自身の目で確認を……。

## BTN 名物司会者ゴードンは……？

プロセロとは対照的に、あくまで国民の側に立って（？）、BTN でずば抜けた高視聴率を誇っているバラエティー番組の司会者がゴードン・デイトリッヒ（スティーブン・フライ）。このゴードンはイヴィーの良き相談相手で、周りからは恋人同様に見られていたが、実はそれはありえない話……。なぜならゴードンは〇〇だから……？

自分の番組の視聴率に自信をもつゴードンはある日、サトラー議長のそっくりさんを登場させて徹底的にサトラー議長を笑い者にするという企画を実施した。

去る4月29日夜、アメリカのブッシュ大統領は毎年恒例のホワイトハウス記者会の夕食会で、自分自身の「そっくりさん」を登場させて「漫談」を披露したことがニュースで報じられた。ブッシュ大統領は、そっくりさんからの手厳しい質問に対してもユーモアで切り返し大爆笑を誘ったとのことだが、果たしてこれは狙い（？）どおり、人気低迷状況からの脱却に役立つのだろうか……。これを見ると、同じ「そっくりさん」の登場でも、その目的は正反対……？

## フィンチ警視の役割は？

サトラー側の人物として唯一人だけ書いておかなければならないのは、フィンチ警視（スティーブン・レイ）。彼は国家公安部の幹部の1人で、“V”を追跡するトップの立場にある人物。サトラー議長は上からただ命令するだけだから、それを受けとめて成果をあげるべき幹部たちはかなり大変……。

しかし、このフィンチ警視は、自分の思考方法を確立させている人間らしく、自分なりの推論と足を使った捜査によってイヴィーを探し当てたり、ラークヒル収容所を調べたり、その他重要な情報に次々とアプローチしていく姿勢は立派なもの。

そして、“V”を追いつけてきた中、遂に今日11月5日、汚染のために今は閉鎖されている地下鉄の列車のスイッチをイヴィーが押すことによって、国会議事堂の爆破が実行されるという現場に到達した。しかしその2020年のイギリスにおける時点での、フィンチ警視の価値観は……？

## 納得できないこと その1

この映画はコミックの原作ながら、約400年前のイギリスの重要な歴史的事実である「火薬陰謀事件」を前提とした、2020年のイギリスにおける「革命モノ」政治ドラマだから、結構面白いもの。とりわけ、ラストのクライマックスシーンにおける、“V”の仮面をつけた無数の民衆による国会議事堂への集結シーンは、日本における1960年安保闘争を彷彿させて圧巻！ さらに、議事堂のド派手な爆破シーンも気分爽快になること確か……？

ところが、この映画には私が「これは到底納得できない」と思うことが2つあるので、あえてそれをここで指摘しておこう。その第1は、“V”は組織としてではなく、あくまで個人として動いているのだから、イヴィーの世話から爆破の段取りまでやるべきことがいっぱい……。

ところが、スクリーン上で“V”は、隠れ家における剣の稽古から音楽鑑賞やビデオ鑑賞まで、1人で悠然と何十役をこなしている。あまりつまらないケチはつけたくないが、これだけ何でも完璧にやられると、つい「そりゃないだろう」と思ってしまうもの……。

## 納得できないこと その2

第2はすごく重要で、いくら目的のためでも、そこまで人の心を試すのはダメだろうということ。ネタばれになると困るので、その内容をここで書くわけにはいかないが、この映画全般を通して、“V”とイヴィーとの人間関係（同志関係＋恋愛関係）が1つの見どころであるところ、“V”による「ある行動」によってイヴィーは怒り心頭に発することに……。イヴィーの頭が丸坊主にされたのもそのせい……？

したがってそれは、私の目で見ても「そりゃひどすぎるだろう」と思うもの。さて、その点について皆さんの判断は……？

2006(平成18)年5月8日記